

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

7

Vol.47 No.7 JULY

2024

小児看護の“いま”と 出逢う

多様な知識と研究・活動



連載

ひらめく かがやく 子どもの力
子ども療養支援士との協働
急性期病院でのプレパレーション

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第36回 気にかけてくれる人

年を重ねると良いことがある。懐かしいとか、感慨深いという感情を体験できることだ。まだ小学生のわが子が、「あー、保育園のときに使っていたオムツが懐かしいなあ」と感慨にふけることはない。振り返るだけの時間を生きてこられたというのは、それだけで大人の特権かもしれない。

私事で恐縮だが、この度、第41回とやま賞を受賞した。「とやま賞」は、富山県出身者が在住者で、学術研究、科学技術、文化・芸術、スポーツの分野において、顕著な業績を挙げ、かつ、将来の活躍が期待される人に対して、その活動を奨励するために贈られるそうだ。大変に光栄なことであるが、授賞式にはお世話になった人を招待してくださいと言われ、しばらく考えあぐねてしまった。私は富山県の高校を卒業後、渡米してしまい、帰国しても東京にいるので、お世話になった人といっても、小中高の先生しかいないからである。しかも何十年以上も疎遠で、連絡先もわからない。

だいぶ迷ったが、これも地域貢献だと意を決して、ホームページを調べたり、母校に電話をしたりして、恩師の連絡先を探した。学校長や教育関係者に取り次いでもらい、10日間ほどで、小中高の先生を何とか見つけることができた。先生たちはちょうど定年退職に差し掛かっていた。ああ、そうか。児童のときは気

づかなかったが、あの頃の先生たちは今の私の年齢だったのだ。順番に電話をすると、昔話に花が咲いた。社会人となった私に、当時は教員間であれが大変だった、こんな反対意見があった、など知らない苦労話をたくさんしてくれた。

25年以上ぶりに声を聞く高校の先生に「お前、よく頑張ったな。心配しとったぞ」と言われたときは、急に高校のときの自分に戻り、少し感極まった。

富山県で過ごした青年期は茫漠とした将来の不安に打ちのめされており、ある種の挫折感を抱いて渡米したのだ。ところが、渡米してさらに世界に埋もれた。英語も母語でないどころか、何のスキルもない自分は大した人間ではないと思い知らされたのだ。しいていうならば、10代後半で勝手に挫折していたのがその後の人生を歩むのによかったのかもしれない。

今回の授賞式への恩師の招待は、私の人生前半の伏線を回収しているようであった。授賞式でもなければ、毎日の生活に追われ、先生たちと再びつながることもなかったと思うからである。自分がまだ何者でもなかった頃を知っている人がいる。気にかけてくれる人がいるというだけで、人は心強くなれる。

私も、あの小児がんの患者さん、どうしているかな、と思うことがある。

佐藤聡美

さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)、第41回とやま賞受賞。